

肩の凝る油屋

十五代目 市村羽左衛門

〈出典：「演芸画報」昭和8年7月号〉

(前略) 今度の油屋は、なかなか体にこたえるね。御覧の通り此役は三方四方から悪態をつかれて、我慢に我慢した揚句に怒って十人斬りをするんだから、始終体に力を入れてイクムため、首から肩の辺がおッそろしく硬張って仕様がなないんだ。それで時々按摩に揉ませるんだが、何せチイツと無理だね。夏は又あの鎌倉山だから泊りがけに遊びに来給え、福岡貢かね、あれは五代目がお手本だ。今度の貢を、新聞で誰かがいつもより手を抜いてあっさり演っているなんて書いてあったが、そんなことはないね。こんな役は、キチンと箱に入れたように出来ているんだから、あっさり演る訳にはいかないものなんだ。殊に梅幸が万野で巧くやってくれるから芝居が面白く出来て、いつもより時間が多くかかる位えだ。

一体この福岡貢という役は妙な人間に出来てるね。始めの合いの山で、万次郎の身を引受ける二枚目役で、次の大々餅⁽⁷⁷⁾の場ではデレデレした和事師。そして油屋では辛棒立役となるんだから、通しにやると此仕訳が肝腎なんだね。今度は油屋の見世と奥庭の二場だけだが、之からのスピード時代は、斯うした歌舞伎芝居も段々チョン切られることになるだろうね。

貢の紋かね。丸に三つ鱗は貢の実録で、齋宮家の定紋というところから従来舞台でもその紋を用いたんだが、私^{あたし}のは今度家の紋の橘にした。それでいいんだね。芝居だからそんなに詮索するにも当るまい。

詮索と云えば、当時の人相書^{にんそうがき}によれば、貢は二十幾歳で五尺二寸位い、中肉で顔は面長、色白く柔和に見え、眉毛濃く、目尻上り、鼻筋通って鼻高き方なんて書いてあるが、芝居をする者には却ってこんな事は知らぬ方がいいかも知れないね。妙にこう気にするのが人情だから、知って可し悪^あしの場合もあろうという奴さ。

五代目の貢は可^よかったね。写真を見てもその気分がよく出てるが、万野を斬って行灯^{あんどう}に凭って刀を振上げた姿など今に目についてるね。それに万野を斬ってからの目色が変わって実際凄味があったぜ。よく『殺気をふくむ』などと本に書いてあるが、五代目のあれなんざアほんとにそう思えるね。